

『赤い大根と青い大根』

怪蘿葡萄

近藤伊津子 編

むかし、あるところに王二という貧しい樵きこりがいました。王二は「世の中の人たちは、福の神ばかり祭っていて、貧乏神を、ちっとも祭らない。これでは貧乏神はかわいそうだ。」と思い、破れ屋の自分の家に貧乏神を祭りました。

それからというもの、王二は、いつそう、貧しくなつて、とうとう三度の飯にもこまるようになり、人々は、王二を馬鹿な奴と、笑いました。

ある日、いつものように王二は貧乏神に線香を上げると、白いひげの、ぼろぼろの綿入れを着、破れた皮の帽子の神さまが口をきくではありませんか。「王二よ、やさしい心の王二よ、これ以上、お前の家にいるのは止めよう。ついては、お礼に宝ものを二つつやろう」といつて神棚から降り、自分の破れた綿入れの上着と、ぼろぼ

ろの皮の帽子を王二に与えました。

「王二よ、お前の嫁とりに、きつと役立つだろう」と言うのと、ゆったり、ゆったりと家を出ていってしまいました。

次の日はとても寒い日で、王二は山に行くのは止め、神さまにもらった、ぼろぼろの上着を着込んで、胡弓を持ち、小銭をかせぎに街に出かけ、茶やに入りました。

昼になると王二は「腹がへった、むこうの店に行つてめしでもたべよう」とつぶやくと、ふしぎなことに、王二がつぶやいただけで、むこうの店に入っていました。腹一杯になって「さっきの茶やに行つて昼寝でもしようか」とあくびをしたら、又、ふしぎなことに、茶屋に着いていました。王二は、この破れ上着はどこでも行きたいところに行ける上着とわかりました。

さて、この茶やの二階には茶やの主人の娘が住んでおり、その娘はなかなかの器量よかったです。娘は王二の姿が消えたかと思うと音もなく現われたのを見て、どんな

魔術をつかうのかたずねました。

王二は得意になり、この上着のおかげであるといいましたら、娘はその上着を脱いで見せてほしいとねだりました。王二はこの娘を前から好きだったので、すぐに脱いで渡しました。

娘は上着を着て、「二階に行こう」と言つて、二階に来ると、上着を自分のたんすにしまつてしまいました。

王二はあきらめて、まだうちには、帽子がある、あれも魔法の帽子にちがいないと思ひ家に帰りました。

王二は家に着くと帽子をかぶり、「茶やにもどりたい」と思つたら、もう茶やに来ていました。

「娘さん、帽子をかぶつて、ホレここに居るよ」と王二が言うと、娘は、あちこち見たがどこにも姿は見つけられません。

「声だけで、どうして姿が見えないの」と娘が言うのを聞いて、王二は、この破れた皮の帽子のふしぎな力を知りました。

王二は姿をかくしたまゝ、娘の手をとり、「天にのぼ

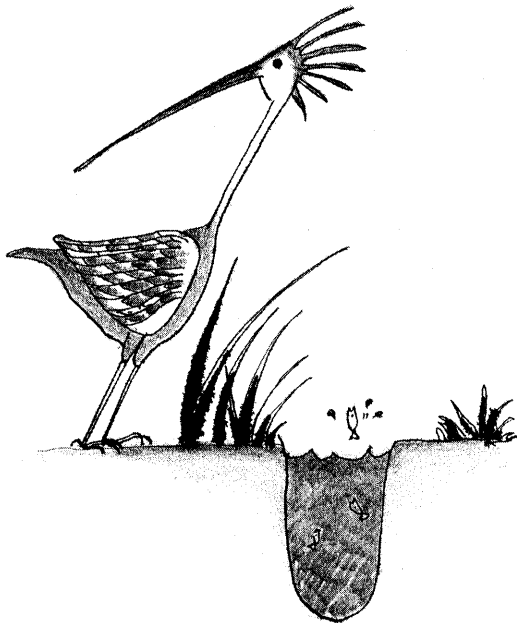
れ！」という、たちまち、空高くのぼり、二人の体は軽々と浮き、風は耳をかすめ、雲は体のまわりを飛びかいました。娘は、こわくなり、片方の手でもがいているうちに、思いがけず、王二の皮の帽子をつかんでしまいました。娘は帽子をかぶり、王二の手を放して、「家に帰る」といいました。

王二は、空から「ぼーん」と草の中に落ち気を失ってしまいました。半日ほど経って、やっと息を吹き返し、そろそろと家の方へむかって歩いていると、白いひげの老人が、大根をほっているところへ来ました。近づいてみると、前に、自分が祭っていた貧乏神でした。

貧乏神は笑いながら「どうした、嫁さんはまだか。」とたずねました。

王二はことこのなり行きをすべて話しました。貧乏神は「この掘ったばかりの青い大根と赤い大根をお前にやろう。うまくて香りのよいこの大根は、きつと役に立つだろう」といって、大根の使い方を教えてくれました。

又、王二は歩きつづけると今度は流れの急な河に困りはて、立ちつくしていると、とつぜん、青い大蛇が河の中から出てきて「王二よ」と呼びました。王二がびくびくしているると「私は、この河の竜王だ。知らぬ間に、悪



神からお札を貼られて青蛇にされてしまった。私の頭の上の札をとってこないだろうか。そしたらお札に、うちまで、乗せていこう」といいました。王二はおそるおそる蛇の頭の上の札を取ってやりました。

ふしぎなことに蛇はたちまち美しい若者になり、若者は王二を肩に乗せ、空を飛び、家につれて帰りました。

それから、王二はお茶やの娘が忘れられません。とうとう、ある日のこと、娘が出かけたあと娘の部屋に忍びこみ、青い大根を置いておきました。娘は帰ってみると部屋の中は、よい香りが満ち、おいしそうな大根があったので、思わず全部食べてしまいました。

突然、娘は地面に倒れ、緑の毛におおわれた獅子になつてしまったのです。獅子になった娘はあばれ、娘の父は嘆き悲しみ、法者よ医者よと見せても何のききめもありません。とうとう、辻札を出しました。「娘の病を治したものには、嫁にやる」と。

王二は赤い大根を持って、娘の家に出かけました。

(娘の父親は半信半疑であったが、わらにもすがる思いであったから王二を二階にあげました。) 二階では、緑の獅子が、のた打ち回り、全身傷だらけとなつていました。

王二は赤い大根を獅子に投げつけると獅子は一口で食べ、ばたんと床に倒れてしまいました。

立ち上つてみると以前の娘の姿にもどっていました。

娘は上着も帽子も王二に返して、王二のお嫁になりました。

めでたしめでたし。

注 胡弓 || 三味線に似た楽器